

久米邦武の宗教観

——『米欧回覧実記』を中心に

一 はじめに

日本が近代化を急いでいた明治四年（一八七二）十一月十二日、世界的にみても例のない大規模な使節団が欧米に向けて出発した。岩倉使節団である。使節団のメンバーは四十六名^①、それに大使や副使の随行が十八名、留学生が四十三名加わり、出発時人数は百七名に及んだ^②。期間は約一年九カ月、回覧した国は十二カ国という大規模なものであった。大使は岩倉具視、副使は大久保利通、木戸孝允、山口尚芳、伊藤博文の四人、いずれも当時の日本の中枢を担っていた人材であるため、明治政府は「留守政府」と呼ばれたほどであった。

『米欧回覧実記』^③は、その長きにわたった使節団の旅程を詳細に記した公式の見聞記録である。全百巻、本にして五冊、執筆したのは久米邦武（天保十年（一八三九）—昭和六年（一九三一）、佐賀藩）だ。のちの東京大学教授で歴史学の基礎を構築した人物であり、また古文書学の創始者である。久米はこの功績により太政官にポストを得、五百円を下賜された。当時の五百円は現在の約二千万円に当たる。明治政府がどれほど『米欧回覧実記』を評価したかが分かる。

久米が岩倉使節団に招聘されたのは出発のわずか一週間前、十一月五日のことである^④。岩倉具視の、皇漢学者を使節団の一員に加えたいという意向で、久米に白羽の矢が立った。明治新政府の権少外史に任命され使節団に参加を要請されたのだ^⑤。日程が迫っていたにもかかわらず二つ返事で承諾し、すぐに出発の準備にかかる。洋服も仕立てなくてはならなかった。

久米の使節団での任務は二つあった。一つは記録を取ることであり、もう一つは宗教についての視察（宗教取調べ掛り）である^⑥。したがって、『米欧回覧実記』には、

久米邦武の宗教観

西田 みどり

西洋での宗教、特にキリスト教についての記述が客観的視点を保って書かれている。また、久米の論評も、記録事項から一字下げる形式で記されている^⑦。

本稿では、『米欧回覧実記』での久米の宗教に対する言及（主にキリスト教に対する）を特にアメリカとイギリスに絞って追うことで、久米の宗教観を追究していく。

二 「宗教取調べ掛り」という役割

なぜ、岩倉使節団は、わざわざ「宗教取調べ掛り」というポストを設けてまで西欧の宗教について調べようと考えたのか^⑧。理由は、西欧の発展とキリスト教は深い関係があることを岩倉が知っていたからである。西欧社会のベースにキリスト教がある——西欧をモデルとして発展しようとしていた日本はその点を重要視し、キリスト教に代わるものが日本にも必要だと考えた。そのため久米に特に宗教に対する観察を命じた。これは久米が皇漢学者であることと関係しているだろう。何を以てキリスト教の代替とするかは、皇国の学問（＝国学）と漢学に精通している必要があるからだ。

日本人は当時「無宗教」であった。久米に限らず、洋行経験のある福地源一郎や林董、田辺太一なども無宗教だということを自覚していた^⑨。使節団の共通認識であった。明治四十一年に書かれた久米論文「神道の話」では、幕末に西洋に行ったメンバーから、西洋人は必ず信仰する宗教を訊いてくるから、何と答えるか考えておいたほうがよいという会話が交わされたという記述がある。そのとき、正直に宗教は無いと言えばよいという意見に対し、それだけは絶対にだめだとして、洋行経験者が言った言葉がこうまとめられている。

……それは甚だ悪い。西洋では無宗教な人間はどう映ると思ふか、人間と云ふものは性悪というが、悪位なものでは無い、獐悪で、智恵を持った虎狼のやうなものは、黙つて置くとはどんな悪い事をするか判らぬものとされてゐる。それで宗教を問ふのである。西洋の是まで経過の歴史はその獐悪が基で、古代より国々の侵略がはげしうして、強い国より滅ぼされ、強い人種より圧迫され、実に残酷非常な目に遭ひ、非常に苦しんで居つて、ヤツと救世主の基督を迎へ初て人間世界になつた。それで基督の福音を聞かない者は先づ人間では無いと西洋人は思つて居る。けれ共世界に別の宗教が有るによつて四大教を書列ねぬれど、西洋ではそれも疑うて居る程なるに、もし其虎狼のやうに思はれる無宗教の人間と聞たなら、どんな事をするか判らぬと云ふ言葉になるから無宗教はいけぬ^①。

このような「無宗教」に対する認識は、現代とほとんど変わらないと言つていい。今でも海外旅行初心者に対して「無宗教だと言つたり書いたりしてはならない。仏教徒と言つておくのが無難だ」といつた注意がなされるが、明治時代の人々も同様であつた。つまり、今も明治も、特定の宗教教団に入信している人を除いては、日本人は特に信仰する宗教を持たないのが一般的であり、「宗教」を意識することなく日々を送つていたのである。外国に行くことで、初めて自分たちが「無宗教」であることを知る。しかし、それは日本社会に宗教がないことを意味するのではない。久米は日本にあつた「宗教」を神道・仏教・儒教とし、当時の人々の宗教観を次のようにまとめている。「西洋人に逢へば何宗かといふ事を問れる、その時どう返答をするか」という問いに対して、その場にいた福地や林らが討論したものをまとめたものだ。

仏教——仏教信者であるとはどうしても口から出ない。それに仏教のことはよく知らないから、そのあと仏教について何か訊かれると答えられない。だから仏教は困る。儒教——西洋は宗教などというものを信じるけれど、我々はこれまでそんなことは信じていない、嘘を言わずに儒教だ、忠孝仁義だと言おうという意見が出たが、それに対して、儒教は宗教ではない、政治機関の教育のやうなものだという反論があつた。神道——日本人は皆神道を信じるというのがふさわしいのではないかという意見が出たが、そうはいかない、神道は世界では宗教として成立していない、且つ経文もないではないか。世界が宗教だと認めていないのだからしかたがないと反論があつた。

このような見解から推測できるのは、彼らは宗教を理解していたということである。

バランス感覚は現代人より優れているのではないだろうか。現代では宗教というカルト的なイメージがあり、話題にしづらい。少なくとも相手を選ぶ。

しかし当時のインテリが宗教を理解しているからといって、宗教を肯定していたわけではない。久米によると、当時宗教とは淫祠であり、学問を志す人から見るとばかしいものであつた、という。それを近代化にあつて、宗教とは貴重なものだと変えざるを得なくなつた^②。それは「機能としての宗教」が国にとって必要だというだけで、信仰という見地からの肯定ではない。久米が「宗教取調べ掛り」を命じられたときは、まだ、宗教は淫祠でありばかばかしいものだというのが一般的考へであつた。久米は命じられたときの心情を後年、このように吐露している。

「どうも宗教は迷惑な事と思ふたけれども仕方が無い^③」

では、アメリカ、イギリスと回覧していく中で久米の宗教観はどのように変化したのだろうか。

三 アメリカ訪問時のキリスト教への観察から見える久米の宗教観

三・一 アメリカの宗教事情

岩倉使節団が最初に訪問したのはアメリカである。明治四年十二月六日にサンフランシスコに到着し、翌年七月三日にボストンを出発するまでの、約七カ月間滞在する。回覧した十二カ国の中で最も長い。なぜ、これほど長く滞在したのか。理由は条約改正交渉のためである。改正交渉にのぞむ条件として天皇陛下の全権委任状の提示が、国務長官フィッシュから要求されたが、使節団は持参していなかつた。後日送らせるという日本側の言い分に対し、全権委任状なしでは交渉のテーブルにつけないというアメリカの強硬姿勢に、副使の大久保利通と伊藤博文がいったん帰国して委任状の発行を願ひ出ることになった。条約改正交渉については使節団と留守政府の意見の相違もあり、全権委任状を使節団に許可することに反対意見もあつたので、委任状の発行がスムーズにいかなかつた。この経緯については種々の事情が絡んでゐる複雑な問題であり、本稿のテーマである久米の宗教観とは直接関係がないため、また別の機会に論じたいと思う。

さて、アメリカに長く滞在したことで、現地の人々の生活環境の観察機会を得て、久米のアメリカにおけるキリスト教理解は進んだと考えられる。そのような観察とリサーチによって、アメリカ人の宗教観を久米は、アメリカ訪問記の冒頭に記された「米利堅合衆国総説」(第二巻)の宗教の項目にこうまとめている。¹⁵⁾

- ① 宗教は「プロテスタント」教が国教。
- ② 羅馬「カドレーキ」教も多い。
- ③ 希臘「カドレーキ」教、猶太教も信仰されている。
- ④ 「カリホルニヤ」には仏教の寺もある。
- ⑤ 信教の自由がある。
- ⑥ 信仰心は篤い。
- ⑦ イギリスも信仰心は篤いが、それ以上である。
- ⑧ 安息日には店はたいてい戸を閉ざし、土曜日の午後から商売は半ば行われていない。

国教はプロテスタントだが、ローマ・カトリック教も多いし、ギリシア・カトリック教もユダヤ教も信仰されている。カリフォルニアには仏教寺院もあと列記し、仏教寺院についてはヨーロッパの他の国では見ることがないという。使節団は前述したように十二の国を回覧しているが、¹⁶⁾それらの国では仏教寺院を見ることはなかったということである。それが、⑤の信教の自由がある、という意見の根拠であろう。

そのように信仰されている宗教、宗派を挙げたのち、信仰のあり方を述べていく。このときの久米の視点には、日本との「比較」が根底にある。

⑤の信教の自由がある、という見方は、日本ではまだ信仰の自由がなかったからこそ出てきたものである。この時期、キリスト教はまだ禁制で、各地に禁制の高札が立てられていた。それが日本の日常であった。キリスト教の国で仏教寺院があるとは、信教の自由があるということであり、久米からするとめずらしい現象であった。

⑥の信仰心は篤い、は日本人が無宗教であるという認知から出てきた言葉である。前述したように、久米をはじめとした岩倉使節団の人々は自分たちが無宗教であるとし、それが西洋人にどんな印象を与えるかも熟知していた。そんな自分たちと比して、西洋人の信仰のあり方が際立って信心深く見えたに違いない。

⑦のイギリスとの比較は、この原稿が、すでに回覧を終了した時点で書かれている

ためである。明治六年九月に帰国し、『米欧回覧実記』を出版したのが同十一年であるから、全体を俯瞰しながら細部を書くという書き方がされている。

⑧の、安息日には店はたいてい戸を閉ざし、土曜日の午後から商売は半ば行われていないのは、日本人から見ると奇妙なことだからこそ久米が書き留めたのだ。キリスト教圏の人にとっては当たり前のことである。

以上が「米利堅合衆国ノ総説」に書かれた久米のアメリカでの宗教観察である。

三・二 「バイブル」社訪問時の記述に見る宗教観

『米欧回覧実記』は日記形式の記録で、総説で全体を紹介したあとは、訪問したところを時系列で記している。その中で、久米の宗教観が最も色濃く表れているのが、明治五年六月二十六日にニューヨークの「バイブル」社を訪問したときのものである(第十九巻 新約克府ノ記 所収)。キリスト教について記述する中に久米の宗教観が露出している。

その日、訪問したのは、「アストル」書庫¹⁷⁾と「バイブル」會社¹⁸⁾、それに少年教會堂¹⁹⁾である。「アストル」書庫についての記述は一行のみ、また少年教會堂については四行、それに比して「バイブル」會社の記述は十二行に及び、内容も会社見学の客観的描写ではなく、「バイブル」についての説明が大半を占める。こう書かれている。

○夫ヨリ「バイブル」會社ニ至ル、(「バイブル」トハ新舊約書ヲ總稱ス) 信教の徒ヨリ金ヲ齎シテ、經文ヲ世界に弘メンカ爲ニ、此ノ會社ヲ建テ、當時ハ已ニ三十種ノ國語ニ譯シテ、各國ニ賣出スト云、支那譯ノ本ヲ、各名ニ贈レリ、總テ經文ハ、歐米ノ人、每家每人、必ス所持セサルヘカラサルノミナラス、半月ノ旅行ニモ、必ス手ヲ離スヘカラサル書ナリ、中ニモ婦人ノ貴重尊敬スル書ニテ、是等ハ亦其身代ニ應シテ、其製本モ亦莊嚴ヲ極ム、金ヲ摺リ玉ヲ嵌シ、美ヲ盡シ善ヲ盡セルアリ、又簡素ニテ貧人モ得ルヘカラシムモアリ、又盲人ニ讀シム、凸字の本モアリ、商店ノ客室モ、逆旅ノ房室モ、每室ニ必ス一部ノ經典ヲオク、獄舎病院ニモ、每人ニ必ス一部ノ經典ヲ渡シテ熟看セシム、皆其價ヲ廉ニシテ發賣ス、價ハ紙張りノ代ニモ當ラス、蓋是ヲ教會ノ積金ニテ製シ、其目的タル利ヲ獲ルニ非スシテ、教ヲ弘ムルニアルヲ以テナリ、場中ニ多ク婦人ヲ役ス、印刷ノ具ハ、ミナ蒸氣器械ヲ用フ、²⁰⁾

以上が「バイブル」社訪問記録の全文である。この記録の特徴は、記録という位置づけであるにもかかわらず、客観的な見聞記はわずかで、久米の解説が大半を占めていることだ。見聞記録は「場中二多ク婦人ヲ役ス、印刷ノ具ハ、ミナ蒸氣器械ヲ用フ」の部分のみで、その他はバイブルについての説明である。中でも目を引くのが、バイブル社はバイブルを広めるために信者が資金を拠出して会社を設立し、一八七二年の時点ですでに三十カ国語に翻訳されていたということである。日本語訳はできていなかったため、「支那語譯」が使節団の人々にプレゼントされた。「バイブル」の浸透ぶりが、日本にはそれに匹敵するような本がなく、よほどめづらしかつたのであろう。これでもかというほど具体的に書いている。列挙すると、こうなる。「」で括ったのは注目すべき点。

- ・この「経文」は「欧米ノ人」の家には必ず備え付けられており、また一人一人、必ず自分のものを持たなくてはならないものとされている。
- ・そればかりか、半月ほどの旅に出るときにも必ず携行しなくてはならない。
- ・中でも女性は、バイブルを貴重であり尊ぶべき本として大切にしている。経済状況に応じて選べるように装丁も豪華なものがあり、金箔を施したり宝石をちりばめたりと善美を尽くしているものもある。
- ・貧しい人でも手に入れられる簡素な装丁の本もある。
- ・視覚障害者のための点字の本もある。
- ・商店の客室にも、ホテルの客室にも、一冊ずつ備え付けられている。
- ・刑務所や病院にも置かれており、一人一人に必ず手渡して熟読させている。
- ・値段はたいへん廉価で紙代にもならないほどである。これは、教会に積み立てているお金で制作しているためで、その目的は利益を得るためではなく、教えを広めるためにあるのであろう。

確かに、このような本は日本にはない。久米の驚きが詳細な描写から伝わってくる。この記述で注目したいのは、アメリカ訪問記であるにもかかわらず、「欧米ノ人」という括りで執筆している点だ。『米欧回覧実記』を執筆した時期は、既述のように日本に帰ってからであるから、久米の頭の中には欧米回覧の体験と、帰国後、執筆のためにさまざまな人に訊いた情報が入っている。書くときは、意識するにせよしないに

せよ、それらが動員されるから、「欧米ノ人」となり、ここで論じられているバイブルについての評論は欧米人全体を久米が観察した結果だと考えてよい。

当然、「宗教取調べ掛り」としての視点がそこには介在している。かくもキリスト教が浸透しているのを目の当たりにした驚きがあったのではないだろうか。

以上のような「バイブル社」訪問記に続けて一字下げで久米の考えが書かれていく。宗教の本質を突いているとも言える久米の宗教観が表明されているので、ここを詳細に見ていきたい。六月二十六日の訪問視察記述は十七行にすぎず、それに続く久米の論評は七十行、約六頁にわたる。

三・三 キリスト教の外的表層と機能

まずバイブルの役割が簡潔に述べられている。

『バイブル』ハ西洋ノ經典ニシテ、人民品行ノ基ナリ

である。近代国家を築き上げていくうえで日本が必要としていたのは、人民品行の基となるもの、そして日本を一つにまとめてくれるものである。つまり、西洋における「バイブル」のようなものであるが、それは日本にはないと断じている。日本の人々の心に浸透しているものという意味では四書がある。男女の別なく尊重している本という意味では仏典があるが、どちらもバイブルほどには浸透してはいない。次のように「バイブル」の果たしている役割を述べている。要約する。

神を敬う心は、一心に努力するものになるものである。また、品行が良いというのは治安のよい社会の根源になるものでもある。国の富強はこれを基盤として培われる。まるで酸素のようなものである。酸素は目には見えないがあらゆるところを満たし、光のもととなる。無味でありながら、時として苛烈な性質を現すが、人々は片時も酸素なしではいられない。宗教とはこの酸素と同じように人々の行動を支えるものである。外国に行くとその地でまず聞かれるのは信仰する宗教についてである。それは、宗教が行動規範の根本にあるからで、その人を信頼できるかどうかを判断するのに信仰を目安にするためだ。したがって信仰のない人は野蠻人と見て付き合うことはない。

これが久米のバイブルの役割についての考えである。信仰、敬神を、社会での宗教の機能という視点から述べているのに注目したい。神の存在の有無といった形而上学

的視点はここにはない。信仰はすばらしい、あるいはばかばかしいという感情的表出もない。ただ、宗教の機能を観察している。

続けて、キリスト教の外的表層が書かれる。ひとりで久米の観察をまとめると「奇怪」である。「是ニテ奇怪ナラスンハ、何ヲ以テ奇怪トセン」と言う。こう書かれている。

我輩ニテ之ヲ閱スレハ、一部荒唐ノ談ナルノミ、天ヨリ声ヲ發シ、死囚復活ク、以テ瘋癲ノ譚語トナスモ可ナリ、彼ノ異端ヲ唱ヘテ、磔刑ニ羅リシモノヲ以テ、天帝ノ眞子トナシ、慟哭シテ拜跪ス、我其涙ノ何ニ由テ生スルヤヲ怪ム、歐米ノ各都、到ル處ニ紅血淋漓トシテ、死囚十字架ヨリ下ルヲ圖繪シ、堂壁屋隅ニ揚ク、人ヲシテ墓地ヲ過キ、刑場に宿スルノ思ヒヲナサシム、是ニテ奇怪ナラスンハ、何ヲ以テ奇怪トセン

キリスト教で奇蹟として尊ばれる事柄を、久米は「奇怪」だと言う。天から声が聞こえる、イエスの磔刑と復活……それは瘋癲の戯言だ。磔にされ血を流しているキリスト像が聖画として欧米の各都市に掲げられているのを見てみると墓場にいるような思いになる……。これは一見悪口を書いているように見える。しかし、そうではない。人が初めて鮮血を流したキリストを見たときショックを受けないはずはないのだから、正直な感想を述べているにすぎない。なぜなら、続けて書かれているのは、以下のようなキリスト教の人々に与えるよい影響だからである。

西洋の人々が聖画を掲げようと強く勧めるのは、敬神という誠実な心を抱いて身を修めるといふ生き方を奨励するためである。西洋の人々が「勉強競励ノ心ヲ興シテ、相協和スルハ」この信仰に基づいているからなのである、と久米は書く。

つまり、宗教の外的表層がどんなに奇妙に見えても、それを信仰する人の品行をその宗教が支えていればよいと考えているのだ。これも書かれている。

「故ニ宗教ハ、形状ト論説トヲ以テ辨論シ難シ、所謂實行ノ如何ヲ顧ルノミ」

「……如何トナレハ宗教ニ尊フベキハ、実行ニアリ、辨論ニアラサレハナリ」

このようなある種ドライといつてよい久米の宗教観は、日本の儒教、仏教のあり方から導き出されているようだ。双方とも日本に伝播したのは二千年ほど前と古いにもかかわらず、社会での役割は「バイブル」やキリスト教にはるかに及ばない。儒教は江戸時代の武士の行動規範を支えるものであり、仏教は宗教として人々の心を支えるものであるべきだが、その役を果たしていないと久米は観察している。一部引用しな

がら、久米の宗教観の核を概観していく。

四書六経は日本に伝わって二千年を経ているが、これを読んで理解できるものは武士の中でさえも「僅ニ幾部分ニオルノミ」²⁶である。その他の人はうわべを聞いただけで本当に理解しているとは言えない。政府がその権力をもって平民に儒教を波及させたがそれは「忠孝仁義」を巷に流播させたにとどまっている。修身の節目を学者に尋ねたとしても要を得た解答は返ってこないし、ではその修身の教えを実行できているかを顧みると「古往今來斷シテ一人ナシト云モ可ナリ」²⁷と手厳しい。そして、その理由は「如何トナレハ、勢利ト生計トニヨリテ、其操ヲ失シ、其説を變シ、時政ト共ニ升沈スレハナリ」²⁸という。権勢と利欲を追いかけ、理念を捨てて信念を曲げ時代の権力に迎合したためだというのだ。久米のこの見解が、具体的にどのような事例を指しているのかは明らかではないが、儒教が政権の具としての役割しか果たしていないと考えていたのだろう。

仏教については、僧侶は戒を守り規範に従って生活をしているが、經典の教えを理解しているものは百人中、二三人ではないかという。信者に至っては、念仏や呪禱を行つてただ情欲に駆られている、品行という観点から仏教を見ると「其ノ品行ノ人ニ著ル、度ヲ論スレハ、世界の最下等ニオルト謂モ、恨ミナカルヘシ」²⁹とまで書いている。なぜ、ここまで日本の信者を悪しざまに言うのか。「米欧回覧実記」が何度か書いたように帰国後書かれたものであることを勘案すると、アメリカ訪問時という回覧の初めだったからそう感じたのだという理由は成り立たない。帰国しても、久米は日本の仏教徒より欧米のキリスト教徒のほうが品行が正しいと考えていたことになる。キリスト教の効用を評価していた。

だからといって久米がキリスト教に帰依するということではなく、ただ、その機能のみに注目している。信仰という宗教の要の部分には興味のないことであった。そこは不思議なほどクールである。久米にとって宗教は淫祠であり続けていたということなのだ。

四 イギリス訪問時のキリスト教の見方

四・一 イギリスの宗教事情

アメリカでの長い滞在を終えて、二つ目の訪問地であるイギリスに到着したのは、明治五年（一八七二）七月十四日のことであつた。『米歐回覧実記』の第二十一巻から四十巻までがイギリス訪問の見聞記に充てられている。『米歐回覧実記』は前述したように五冊本であるが、その一冊目がまるまるアメリカ訪問に、そして二冊目がイギリス訪問である。イギリスに滞在したのは十一月十六日までの約四カ月、アメリカより短い、イギリスの次に訪問したフランスは約三カ月、ベルギーは八日間、オランダは約十日間などから見ると、イギリスは長い。駐日公使であるパークスが常時岩倉具視に同行して精力的に案内したためもある。

さて、『英吉利国ノ総説』（第二十一巻）では、イギリスの宗教事情について以下のようにとめられている。³¹⁾

- ① 宗教への信仰心の篤さはアメリカと伯仲している。
- ② 主に信仰されているのは「プロテスタント」教で、これが国教である。
- ③ 羅馬「カドレーキ」教も信仰されているが、九分の二にすぎない。
- ④ 猶太教を信じている人もいる。
- ⑤ ささまざまな宗教が信じられており、その数はたいへん多い。
- ⑥ イングランドでは「エписコパシー」宗を主とする「英吉利宗」が信仰されている。その礼拝の儀式は「天主教」とよく似ている。スコットランドでは「プレスベテリヤンス」宗を主に信仰している。アイルランドでは羅馬「カドレーキ」教が主に信仰されている。その流派の数を挙げれば四十派を下らない。

これに続いて書かれているのが宗教の効用である。「教門ハ西洋ニテ風化ヲ維持シ、生業ヲ励スニ緊要ノモノニテ、人民の信否ハ、ソノ風俗ニ關スルコト輕カラス³²⁾」と肯定的に捉えられている。特に政治家は信仰を重要視しており礼拝は欠かさないという。土曜日の夕方から安息日で商店は閉まる、イギリス人ではない旅行者も礼拝堂に行かなくてはならないと、信仰がある種の厳しさを持っていることが推察できる。

さて、以上がイギリスの宗教の全般的な説明であるが、このあと、なぜか久米は自

身の宗教観を唐突に披露している。それも、宗教のルーツという大きなテーマである。

宗門ノ一種、米歐ノ耶穌教ニ於ル、亞細亞西部ノ「マコメット」教ニ於ル、東部ノ佛教ニ於ル、其源ヲ同クシテ、其流ヲ異ニセルニ似タリ、³³⁾

というのである。すなわち、宗教の一つである米欧のキリスト教も、アジア西部の宗教であるマホメット教も、東部の仏教も、その源は同じである。ただ流播していく過程で見かけが変わっていっただけで、元は同じものようだ――。

この考えは、久米の宗教観の骨子を成すものである。十数年後の明治二十四年、『史学会雑誌』（第二編第二十三、二十四、二十五号）に三回に分けて発表された論文「神道は祭天の古俗」でも、久米は同じ宗教観を述べているからだ。

印度の睿智は早く發達し、六仏出で、三世因果の説を始め、二千五百年前に釈迦出て其意を推闡して衆に説教したれば、信徒より天に代る世の救主と仰がれたり。釈迦とは能仁の義にて、徳充ち道備りて万物を濟度するの義と云。是宗教の起りなり。其後六百余年を経て、羅馬に耶穌出て、亦天降の救い主と仰がる。思ふに麦西も耶穌も印度釈教の西に流伝して、別派の宗教をなしたるものなるべし。（傍線は西田による。）³⁴⁾

この論文では宗教の源がインドであることが明記されている。イギリス訪問の見聞記では源が同じとだけしか書かれていない。それだけ久米の研究が進んだと見る事ができる。

「宗教取調べ掛り」は迷惑なことと言いながら、久米は帰国後も宗教への関心を持ち続け研究を推し進めていたということだ。実際、久米の書いた論文には宗教に関するものが多い。

また、『米歐回覧実記』の中にインド訪問の記述がある。書名を見ても明らかのように、岩倉使節団は米欧が公式訪問である。だが、フランスのマルセイユ港から帰国の途についた使節団は、途中、セイロン（現スリランカ）やインドのカルカッタに寄港し上陸して、ホテルに宿泊したり、散策したりしている。久米は現地の寺院にまで足を運んでいるのだ。本稿では、冒頭で断つたようにアメリカとイギリスを中心に久

米の宗教観を追っているので、セイロンやインドでの久米の視察に言及する余裕がないが、別の機会にこの点については論じるつもりである。

四・二 イギリス見聞記でのキリスト教の記述

イギリスでの岩倉大使たちの視察旅行はアメリカとはかなり異なっていた。日本に駐留していた公使パークスが段取りして英国中を旅行させたからである³⁵。使節団の主たる視察地は国会議事堂や造幣局、紡績工場、石炭採掘場、兵器工場、造船所等、近代国家建設のための施設が占めている。が、その一方で、風光明媚な地として知られるハイランドにも滞在している。長旅で疲労が見られた岩倉大使の静養のため、使節団の中でも同行したのは久米を入れて数人にすぎない。

イギリスでのキリスト教に対する記述は、アメリカのものに比して素っ気ない。ただ淡々と見学した情景が描写されているところが大半である。例えば、九月一日に「セントジョージ」礼拝堂に行った記述はこのようなものである。

午前十時五十分、旅館前ナル、「セントジョージ」禮拜堂に至ル、旅館ヨリ堂前迄³⁶巡査ニテ路ヲ固メ、一行ノ外、市中ノ男女百餘名、共ニ教堂ニ入り、外戸を鎖シ、調樂ヲキケリ、コノ教堂ハ石造ニテ屋宇甚タ高朗ナリ、四壁四柱ミナ精密ノ彫刻アリ、府中ニテ指ノ屈スル大建築ナリ、正面ニ大樂器ヲ仕掛ケ、三面ニ回廊アリ、中堂ヲ合セテ千人ヲ入レテ餘裕アリ、此日ハ樂器ノ機關ヲ押ヘテ、樂ヲ調スルコト、二曲、一樂師ノ手ニテ調スル所、殷々トシテ、大音律ヲ發シテ堂ヲ充ツ³⁷、

これだけで、久米の論評は書かれていない。記述はすぐに次の訪問地に向かう蒸気汽車に移っている。アメリカの「バイブル」社に行ったときのような滔々とした論は繰り返されてはいない。イギリス見聞記全体を見てもキリスト教に対する記述は少ない。ところが後年の論文にイギリス訪問時のいわば裏話が書かれている。『米欧回覧実記』はあくまで公式の見聞記録であるから、書いてよいものが限られる。久米の論評もそのあたりの配慮はされているわけで、ここでは書けなかった事実があることは容易に想像できる。

イギリス訪問時の見聞の裏話が書かれているのが明治四十一年に『東亜の光』（第三巻第五号）に発表された論文「神道の話」である。使節団参加時は三十三歳だった

久米は、七十歳になっていた。岩倉具視は明治十六年（一八八三）に鬼籍に入り、副使の木戸孝允は明治十年（一八七七）病死、そしてやはり副使であった大久保利通は明治十一年（一八七八）に刺殺されている。久米の所属先も、太政官から帝国大学教授に、紆余曲折を経て早稲田大学教授にと変化、関係者の死去と所属の自由さから、久米の本音と使節団の本音が筆にのせられたのであろう。

「神道の話」によると、パークスは岩倉大使や副使の木戸や大久保を教会の礼拝に連れて行ったという。儀式にも参加させられたということだから（恐らく聖体拝領であろう）視察の域は超えていると考えてよい。

さて「神道の話」は講演録の体裁で、自分が現在、宗教家、あるいは神道家のように思われていることへの違和感から始められている。「私の考では宗教といふものは第一に思想といふものが他の学問よりも大事なこと、と思ひまするから、その思想に付て一つ御話をして置かねばならぬ³⁸」と断つたのち、本題に入る。

イギリスでの見聞は内輪話を含めてこう記されている。以下、その経過を一部引用や要約を交えながら論じていく。

英国に渡つたら、英国公使パークスがすべてを段取りし英国中を旅行させ、常に付き添って製作場や諸々の会社を案内した。移動の汽車でも同じ客室に入り、説明し続けた。パークスと同じ客室には、いつも岩倉大使と副使の木戸、大久保、そして久米が一緒であった。（他のメンバーは岩倉大使と一緒にと窮屈だからと近寄らなかつたという）。パークスはこんなふうにした。

「日本は西洋の文明、文明と言っているけれども、機械や武器など物質的なものばかりを文明だとして力を入れている。そうした理解ではまだ文明を理解したとは言えない。西洋が隆盛した根本にあるのは宗教で、これがとても大事なものののだ」

そういうと、その文明の根本にあるものを教えると言って、彼等を教会に連れて行き礼拝の儀式に参加させた。久米はそれをいかにも迷惑そうにこう記している。

「……、日曜日には御寺に行つて、何を言ふのやら一向に判らぬ説法聞させられ、其中に祈禱とかいふ妙な形式があつて岩倉も木戸も大久保もみんなその中に交つて仕方無しに其形などして、さうして廻つたです³⁹」

そうして帰つたあとは、パークスが感想を聞く。岩倉大使がサービストークで「大きに益を受けた」というと、それならキリスト教を日本に入れる、内地旅行も認める

と、二つの要求を出した。このころの日本は外国人に国内旅行を認めておらず、またキリスト教も禁制であったから、パークスは岩倉たちにそう迫った。

ここには、明らかに文化的ギャップによるパークスの勘違いがある。

日本人は宗教に対してある意味無節操であるから、信者でなくても教会にお参りするし、儀式にも参加する。しかし、キリスト教徒は厳密であるから、例えば神社に行っても「見物」はするが「参拝」はしない。その視点から岩倉たちの行動を解釈すると、礼拝したのであるからキリスト教への信仰を持ち始めたとパークスが考えても不思議はない。

パークスの強引な要求に岩倉は「何れマアさういふ事にしやうと好い加減に答へられたが、中々喧しかつた」ということだ。「何れマアさういふ事にしやう」という返事のしかたは日本人からすれば、その気はないという意味だが、パークスは文字どおり承諾の意味に取った可能性はある。結局、岩倉使節団帰国後、この両者の禁止は撤廃されている。

パークスと別れたあと、岩倉たちが話した宗教に対する感想が久米の手でこう記録されている。

「そこで岩倉公、木戸、大久保などの思想はどうであつたかと言へば、どうもあんな宗教を信じて居るのかといふやうな少しの冷笑の気味で、パークスもアレを信ずる所がどうも妙だと言ふ風で……」

パークスに答えた内容とは全く異なつた感想である。

そして続けて「其頃まで矢張り宗教を信ずるのは馬鹿な事と思ひながらも」と当時の宗教への一般的見方が語られている。

これが、使節団ひいては日本人インテリの一般的な宗教感覚だったのであろう。ただ、久米が同論文で述べているように、岩倉使節団を境として、日本人の宗教に対する考え方は変化を余儀なくされる。

「此の如く初めは冷笑して居つた宗教を、十四、五年の間に是非信仰しなければ眞の精神文明は望まれぬといふことに成て、トウ／＼宗教といふものは人類に無くてはならぬ、極く必要なものといふことになり、昔の思想とは全く反対になつて来た」

パークスが汽車の中で岩倉たちに、物質的なことばかりでなく西洋の繁栄の根底にあるものを見よ、それはキリスト教だ、と言つたことが、日本人に浸透したと見るこ

とができる。ただ、久米自身はどうもそれを疑っていたようで、「そういわなければならぬようになった」という表現をしている。自分はそうは思っていないのだが、世間の風潮はそうだということである。

以上が、イギリス訪問時の久米の宗教観であるが、ここで問題にしたいのは、宗教を馬鹿な事とし、冷笑していた久米たち日本人が、むしろ西洋人よりも人道的であることだ。無宗教の民は野蛮人であると西洋人は言うが、日本人はむしろ人道的見地で物事を見るところがある。そのような見方ができる日本人の根底には何があつたのか。西洋人のキリスト教に匹敵するものを日本人は持っていたのではないか。

以下の章ではそれについて考えてみたい。

五 『米欧回覧実記』に見る人道的視点

『米欧回覧実記』には人道的視点から事象を描写、論評している部分が多々見られる。「無宗教」であり、根底に「キリスト教」などの宗教を持っていない日本人が、なぜ人道的視点で事象を見たのか。しかも、そうした視点で書かれた事柄は、日本の近代化に役立つ情報ではない。例えば、黒人がアメリカで奴隷とされ理不尽な仕打ちを受けたことは、日本の近代化とは関係がない。あるいは、イギリスでの社会事業家「サー・タイトル」の貧しき人々に対する慈善活動も軽く触れれば済むことである。しかし、久米は奴隷制について詳細に歴史的経過を述べ反対であることを表明し（第十一巻）、後者では肝心のアルパカ工場の描写より慈善活動報告に力を入れている（第三十五巻）。黒人奴隷については明治五年（一八七二）年二月十七日、黒人学校を訪問したときの記述である。黒人学校の見聞記自体は十行と短いのであるが、それに続けて書かれた黒人奴隷の歴史的経緯や久米の意見は五十三行と長い。内容は奴隷制の歴史で、アメリカで捕獲されるところから、運ばれる船舶での扱いなど事細かに記されている。そして奴隷制に対する怒りがはつきりと表明されている。箇条書きにまとめると以下のようになる。

- ・ 扱いの残酷なことは「奴婢」を超えている。
- ・ アフリカから運んでくるときは、船の船倉に隙間なく押し込み食物も排泄物もいっしょくたの状態である。弱って死んだ者は海に投げ込んで終わりである。

・『周礼』ではすでに人身売買を禁じている。それが近年まで続いていたことは言語道断である。

このような記録を克明に書いたのち、論評の最後に、

「皮膚ノ色ハ、智識ニ管係ナキトモ亦明ケシ。(中略) 顧フ二十餘年ノ星霜ヲ経ハ、黒人ニモ英才輩出シ、白人ノ不學ナルモノハ、役ヲ取ルニ至ラン」⁴³⁾と書く。

まだ、このころは黒人に対する偏見が強かった。にもかかわらず、久米は皮膚の色は知能や能力とは関係がないとし、二十年も経てば黒人に英才が輩出し、白人の仕事を取ってしまうという予想さえ立てている。

またイギリス編では、明治五年(一八七二)九月二十三日のプラットホルトの「ソルテヤ邑」見聞録に、社会事業家「サー・タイトル」の活動がページを割いて書かれている。経過を箇条書きでまとめる。

- ・もとは荒野だったところを「サー・タイトル」氏が開拓してアルパカ工場を建設した。
- ・当時はアルパカは加工不能であったが技術開発によって布地に加工できるようにした。
- ・素材が安価であったから利益が出て、それを村人たちの生活向上に還元した。
- ・村に小学校を建設し子供たちが教育を受けられるようにした。
- ・病院を建設し医療と医薬品を提供、職人が老衰したときのために養老院を造った。
- ・村人たちの「心性を正しい方向に導く」ために教会を建設し、村民がお詣りして説教を受けられるようにした。

これは、むしろ国家がやるべきことである。それを市井の実業家が実現したということは、国家の力が及んでいないということでもあり、近代化を目指す日本にとって必要な情報とは思えない。視察した久米は何を考えてかくも詳細に書いたのか。やはり、村を見ているときに何か感じるものがあつたのであろう。

「英國人ハ、職工ヲ保護シ、貧民救護ニ力ヲ盡スヲ、榮譽ノ一トナス」⁴⁴⁾

とあり、それが久米にとっては意外なことだったと考えられる。

こうした一見使節団の渡航目的から外れたような記録が掲載され発刊されている。『米欧回覧実記』は「久米邦武編」と銘打たれているように、執筆したのは久米であるが、情報収集は文部理事官と一緒に渡航した人々に訊くなどして広範囲に行っている。『米欧回覧実記』へのこのような記録の掲載も総意だと考えることもでき、人道的視点は久米独自のものではなく、当時の人々に共通のものとも考えることもできる。では、こ

の根底にあるのは何なのであろうか。無宗教であり、根底に宗教を持たない日本人は、それに代わるものとして何を持っていたのか。

六 久米の宗教観と日本人の祈りの習慣化

論文「神道は祭天の古俗」は次のような言葉から書き始められている。

「日本は敬神崇仏の国なり」⁴⁵⁾

日本は神を敬い仏を崇拜する国だ、というのである。

続けて、国の歴史はこの中から発達したにもかかわらずこれまでの歴史家はその沿革を考えることを怠ってきた、そのため物事の淵底を究めることができなかつた、という。そして「敬神は日本固有の風俗なり」と断じている。

この論文は有名な久米事件の発端となつたものであるが、それについては本論考で触れる紙幅がない。ただ、久米が「誤解された」と述べていることのみご紹介しておく。

「神道は祭天の古俗」で論じられているのは日本の宗教小史であり、日本人の根底にある宗教心を歴史的事実から照射しようという試みである。久米が注目しているのは、冒頭の「日本は敬神崇仏の国なり」に集約されているように、祈りである。日本人は祈る民であり、祈りが日常の風俗になっているという。つまり祈りが習慣化されているということだ。祈りの習慣化として挙げられているのは四点である。

- ①山王祭や神田祭のように全国各地で毎年行われる大祭。あるいは氏神や天神、稲荷の祭り。現在は都会になつていても、かつての古農村の時代の村区で毎年行われていた祭りが存続している。田舎の村々には氏神があつて毎年祭礼が行われる。これらは全国的な風俗である。
- ②新穀を収穫したときの濁酒蒸飯、新酒供饌の習慣。各地の古俗に則つて祭りが行われている。この祭礼は神への感謝の気持ちを表しており、すべての人々が毎天天に祈ることを務めとしている。
- ③水旱風雨疾病などが生じたときに行われる攘災の礼。
- ④人々が毎日行う日々の祈り。早朝、人々は男女の別なく、さまざまな形式で祈つて

おり、柏手の聞こえない里はない。

この四点の中で、④の日々の祈りについての記述が最も長い。また、久米の肉声がかもっている。現代語訳で紹介する。

旅行などしたときに、早朝に村を歩いていると、家の外でも、裏通りの家でも、男女の別なくいたるところで人々が祈っている。朝起きれば、河の流れや井戸水で顔を洗い口を漱いだ後、拝礼を行う。拝礼の柏手の聞こえない里はない。これは神代から続けられている現象である。その礼拝の方法を細かく観察すると、合掌して祈っている人もいるし、「南無……」を唱えている人もいるし、あるいは上下四方を拝したり、日の出のほうに向けて拝礼している人もいる。また、その拝礼も、立って祈っている人もいれば、跪いている人もいて、崇仏の祈りにも似ているし、回教徒のようにも見える。それは礼拝の方法を教えた人の流儀によるものであろう（仏教の正式な祈り方を教えられた人は仏壇に向かって祈る）。このようにさまざまな流儀の祈りが行われていることが、かえって正直で飾り気のない誠の祈りの表れである。これらの拝礼はすべて天に対して祈りを捧げて福を求めためのもので、往古より行われている祓禊祭天の遺俗である。日本人の日本人たる真面目な部分である。⁴⁶⁾

以上のように、日本人が神代から今に至るまで行ってきた祈りについて詳細に述べたのち、国が清潔を好んで、穢れを嫌うことが甚だしいのは、この祈りの習慣によるところが大きい、いわゆる衛生という面から清潔を好むのではないとしている。

そして「天子」の祈りへと論を広げていく。引用する。

……今に天子は常日に高御座たかみくらの礼拝を怠り給はず、新穀登れば神嘗・新嘗祭を行はせられ、毎年大祭日として、全国に之を祝ひ、御一代に一度の大嘗祭を行はせられる。是神道の最重最古なる典なり。⁴⁷⁾

このように、人々の習慣化された日々の祈りと、「天子」の祈りについて述べると、そのまとめとして、「雲の上の至尊」から「野村裏店の愚民」に至るまで、毎日、毎年に向かって祈り、感謝するという勤めを行うことが一つの規範になっている、これ

は誰が勧めたわけでもないのに存在し、命令されたわけでもないに行われている、君臣一体となつてこのような祈りが捧げられているのは国家が堅固である証で、「思へば涙の出る程なり」（傍点原文ママ）としている。

このような久米の観察から見えてくるのは、久米がアメリカやイギリスで観察したキリスト教の社会における機能——人々の行動規範の基になる——は、日本にもあった。それが祈りであるということである。

七 おわりに

以上、久米の宗教観について『米欧回覧実記』のアメリカ及びイギリス訪問時の記述を中心に観察してきた。このことから明らかになったのは、久米のキリスト教の見方が外面よりその社会的機能にフォーカスされていることである。それは宗教の本質を捉えていることにほかならない。なぜ、そんな捉え方をしたのか。理由は日本にもキリスト教に匹敵する「祈りの習慣」があったからである。久米は、日々日本人の行うさまざまな祈りの形態に接していた。仏壇の前での祈りもあれば、太陽を礼拝する人もいる、四方を拝する人もいれば、上下を拝する人もいる。座って祈る、跪いて祈る……とさまざまな祈りの形を幼いころから久米は見ている。それは日本人にとつて特別なことではなく、米欧で「バイブル」が浸透しているのと同様に当たり前のことであつたらう。

久米は佐賀藩出身であり、父親は長崎聞役を任としていた久米邦郷である。長崎に行くこともたびたびあつたはずであるから、オランダ人に接することもあつたであろう。長崎は唯一海外に開かれた地として全国の藩が藩屋敷を構える国際都市であつた。藩による文化風俗の違いも見えていたに違いない。さらに、藩校・弘道館での学生時代、義祭同盟に関わっていたこともある。「宗教」という言葉は使用せずとも、宗教的なものは身近であつたのだ。それが「宗教取調べ掛り」の任務遂行時の久米の視点に影響している。ただ久米自身が、祈りを宗教に結びつけて意識化していくのは時間が必要であつた。

「神道は祭天の古俗」「神道の話」をはじめとして、「古代神道の重なる式」「神道と

君道」「惟一館開館式に臨み宗教と歴史との関係に就て」「倫理の改良」「神籠石は全地球の問題」「神籠石、石輪及び秦の古俗」……など、久米は宗教に関する論文を何本も書いています。「聖徳太子実録」も聖徳太子伝説はイエス生誕の物語を取り入れているという観点から検証すると、宗教関連論文と言えなくもない。「久米事件」のあと、講演に呼ばれたのはキリスト教のグループであるし、キリスト教を基盤とした立教大学でも教授を務めている。久米自身は意識していなくても、宗教的視点で物事を観察する習慣があったと考えてよい。

久米の宗教観は、祈りの習慣化からくるもの見方を基盤としている。祈りはすべての宗教にあるものであるから、宗教の本質を自然に理解していた。それがキリスト教の見方にも反映し、また人道的視点の根源でもある。『米欧回覧実記』でのもの見方の根底にはそんな久米の宗教観があったということである⁽¹⁸⁾。

註

- (1) 出発時の人数である。その後、アメリカで二人が合流。そのうちの一人である畠山義成(杉浦弘蔵)は久米と共に筆録に携わった。
- (2) 留学生の中には、のちに津田塾大学を創立した津田梅子(当時八歳)や、久米が近侍として仕えた第十代佐賀藩藩主・鍋島直正の長子・鍋島直大もいた。日本の近代を切り開く人々が使節団とともに海を渡ったのである。
- (3) 正式名称は『特命全権大使米欧回覧実記』、通称『実記』と言われるが、ここでは『米欧回覧実記』という呼称を用いた。
- (4) 歴史学には、久米のほかに重野安繹、星野恒がいた。
- (5) 久米自身は「余が見たる重野博士」(『歴史地理』第十七卷第三号所収、明治四十四年)、『久米邦武歴史著作集 第三卷』百二十頁、吉川弘文館、平成二年)の中で十日前だと書いている。
- (6) 久米と岩倉との縁は佐賀藩時代に遡る。岩倉の子息が佐賀藩に遊学したときその面倒を見たのが久米である。また、岩倉は佐賀藩第十代藩主・鍋島直正とも交流があった。久米は直正の近侍を務めていたから岩倉とも会う機会があっただろう。久米を抜擢したのはその力量を知っていたからだと考えてよい。ただ、久米自身は前掲論文「余が見たる重野博士」の中で、自分は重野安繹の代わりだったのではないかと推測している。

(7) その後、ロンドンで新たに「使節紀行纂輯専務心得」を命じられている(一八七二年八月三日)。このとき恐らく岩倉使節団の見聞記録を公の報告書として刊行しようということが決まったのではないかと考えられる。

(8) このような形式の書き方は『米欧回覧実記』の全編にわたり実施されている。特に「比較」の視点で西欧と日本を論じるときに多用されている。

(9) 「宗教取調べ掛り」を任じられたのはもう一人いる。文部官僚の田中不二磨である。が、本稿では久米の視察に絞って論を展開する。『米欧回覧実記』執筆にあたって久米はできる限りの資料を読み、同行者・関係者の話を聞くなど徹底的に調査・研究している。田中の内部報告書である理事功程も読んでいたので、『米欧回覧実記』に反映されていると考えられる。

(10) 「神道の話」(『東亜之光』第三卷第五号所収、明治四一年)、『久米邦武歴史著作集 第三卷』三二二頁。

(11) 同、三二二頁から三二二頁。

(12) 同、三二二頁。

(13) 同。

(14) 同、三二二頁。

(15) 帰国時に経田し寄港した国もあるがそれは含んでいない。

(16) 『特命全権大使米欧回覧実記 第一卷』三八〇～三九頁。(太政官記録掛刊行、明治一年)／昭和五〇年復刻、宗高社)。

(17) 正式訪問のみ。

(18) アスター図書館。

(19) 聖書協会。

(20) 青年クリスチャン教会 Y M C A。

(21) 『特命全権大使米欧回覧実記 第一卷』三五九～三六〇頁。

(22) 「支那譯ノ本ヲ、各名ニ贈レリ」も記録として捉えることができるが、描写とは異なる。

(23) 『特命全権大使米欧回覧実記 第一卷』、三六一頁。

(24) 同、三六二頁。

(25) 同、三六三～三六四頁。

(26) 同、三六二頁。

- (27) 同。
(28) 同。
(29) 同、三六三頁。
(30) 帰国時の出発港がマルセーユだったため、もう一度フランスの地は踏んでいる。
(31) 『特命全権大使米歐回覧実記 第二卷』二九〇頁。〔太政官記録掛刊行、明治二年／昭和五〇年復刻、宗高社〕。
(32) 同。
(33) 同、二九〇頁。
(34) 「神道は祭天の古俗」(『史学会雑誌』第二編第三号〜第二五号所収、明治二四年、『久米邦武歴史著作集 第三卷』、二七四頁)。
(35) パークスはやり手で知られる外交官である。日本の前には中国に赴任しており強引な手段で開港させた。日本でも、例えば長崎の牢に捕えられていたキリスト教徒を解放しろなどといった内政干渉にも近い要求を突き付けた。このとき、パークスと対峙し論破したのが久米の幼馴染である大隈重信だ。パークスは今後の「大口取引先」として日本を捉えていた。またキリスト教の布教にたいへん熱心であった。
- (36) 『特命全権大使米歐回覧実記 第二卷』一四八頁〜一四九頁。
(37) 「神道の話」三二九頁。
(38) 同、三三二頁。
(39) 同。
(40) 同、三三三頁。
(41) 同。
(42) 同。
(43) 『特命全権大使米歐回覧実記 第一卷』二二五頁。
(44) 『特命全権大使米歐回覧実記 第二卷』三三〇頁。傍点は原文ママ。
(45) 「神道は祭天の古俗」二七一頁。
(46) 同、二七二〜二七三頁。
(47) 同、二七三頁。
(48) なお、本論文では、紙幅の関係もあり触れることができなかったが、久米とキリスト教の関係については山崎渾子氏の「久米邦武とキリスト教」(大久保利謙編『久米邦武の研究』所収、吉川弘文館、平成三年)がある。また井上章氏も『キリス

ト教と日本人』(講談社、平成一三年)で久米とキリスト教の関係について言及している。いずれも、本論文とは視点を異にしているが、ご参考までにご紹介しておく。